## 2019年度「教学と現代」報告 「佐藤『元の理』学の世界」

金子　昭

２月25日、天理大学研究棟第１会議室を会場に、今年度の「教学と現代」が開催された。今回は、おやさと研究所研究員である佐藤孝則教授の「最終講義」を兼ねて、これまでの「元の理」研究の成果を示す「佐藤『元の理』学」をテーマとして取り上げた。

新型コロナウィルス感染拡大が伝えられる中であったが、小学生からお年寄りまで合計82名の参加者があり、皆、最後まで熱心に聴講した。参加者には全員、マスク着用と手指のアルコール消毒に協力していただいた。

堀内みどり主任の開会挨拶、担当者の金子による趣旨説明の後、佐藤研究員が「『元の理』の自然科学的考察と今日的意義」と題して講演を行った。講演内容は次の４つの柱からなるものであった。

### １．「元の理」研究の背景

佐藤研究員は、それまで11年間勤務していた帯広百年記念館から1993年４月におやさと研究所に赴任し、今年で27年目を迎える。この間、天理大学や天理教校第二専修科などで生物学・環境学に関わる講義を行い、また専門分野である両生類生態学・環境教育学・宗教的環境論の研究に従事してきた。さらにまた、NPO法人環境市民ネットワーク天理の理事長を務め、実践活動として天理市内外で環境保全活動を実施してきた。

こうした多彩な活動を回顧しながら、天理教の教えの根幹である「元の理」を自然科学の視点から研究するに至った経緯を説明。佐藤研究員は、天理教学研究が生物学・環境学の講義や研究と交わる焦点が「元の理」の普遍化であると捉え、これが最終的に目指す目標になると述べた。

### ２．「元の理」の動物学的考察

佐藤研究員は、自分の研究を「元の理」の動物学と位置付ける。ここでは、「元はじまりの話」に登場する、神名を授けられた10種類の水域棲生物を学術的に同定する考察が行われた。それぞれの動物について、「こふき」本からその名称や姿かたちの描写を集約し、『和漢三才図絵』などの叙述や図絵などを参照しながら、実在のものであれ架空のものであれ、実際にどの水域棲生物が該当するか、綿密な精査を行った。

「うを」は「魚」のことではなく、当時「ぎぎよ」と呼ばれた「サンショウウオ」であり、「み」は「白蛇」で「水蛇」である「スナヤツメ」であると、佐藤研究員は同定。サンショウウオやスナヤツメは、田圃に数多く生息していた「ドジョウ」とほぼ同じ大きさであるが、当時の大和地方でも希少な生物であり、「どろ海中を見澄まされると、沢山のどぢよの中に、うをとみとが混ざつている」という『天理教教典』第３章「元の理」の叙述に符合する。また、「しやち」は実在のシャチではなく、架空の生物である「魚虎（しゃちほこ）」であると指摘。その他、「かめ」、「うなぎ」、「かれい」、「くろぐつな」、「ふぐ」についてもそれぞれ同定を行った。

上記の動物たちが人間創造の「道具・雛型」として比較的サイズが小さく、具体的で身近な生き物であるのに対して、月日親神であるくにとこたちのみこと、をもたりのみことが取る姿の「大龍」と「大蛇」は別格であり、どちらも巨大な存在である。佐藤研究員は毒蛇への畏怖心が龍の姿と重ね合わせられ、さらにこれを大きくしたものが「大龍」ではないかと推測。また「龍蛇信仰」と呼ばれるように、龍と蛇は不可分の関係であり、「大蛇」もその文脈の中で理解することができると説明した。

### ３．「十全の守護」の自然科学的解釈

ここでは、上記の動物学的考察の成果を踏まえて、10種類の水域棲生物の「性」（性質・特性）から導き出される親神の「十全の守護」について、自然科学的な解釈が行われた。いざなぎのみことの神名を与えられた「男雛型」である「うを」に、「男一の道具・骨つっぱり」の守護の理を有する「月よみのみこと」（姿は「しやち」）を仕込んだ意味合い、またいざなみのみことの神名を与えられた「女雛型」である「み」に「女一の道具・皮つなぎ」の守護の理を有する「くにさづちのみこと」（姿は「かめ」）に仕込んだことの意味合いをはじめ、佐藤研究員は「十全の守護」について、それぞれに対応する10種類の水域棲生物の「性」を踏まえて読み解く試みを行った。

### ４．「元の理」の今日的意義

佐藤研究員は、発生と進化の関係性を定式化した発生砂時計（ファイロタイプ）モデルを紹介しながら、「虫、鳥、畜類」など「八千八度の生まれ更り」を進化史的に評価し、その中でもとくに「皮つなぎの道具」としての「かめ」と脊椎動物の基本設計との関係について述べた。また、世界の分布状況から類推される「うを」（サンショウウオ）の再評価についても説明。これらの話の中で、日本における進化論の受容状況やサンショウウオ研究の最先端の成果についても披露した。そして親神による「火水風」の守護の側面から、環境問題に対する解決策が見いだされると結論づけた。

佐藤研究員の講演内容の主要部分は、「２．『元の理』の動物学的考察」と「３．『十全の守護』の自然科学的解釈」に当てられた。

佐藤研究員は当初の予定を超え、２時間にわたって熱演。多くの教友は、この講演を通じて「元の理」の動物学の立ち上がる場面に居合わせる思いであった。質疑応答の部でも、佐藤研究員は丁寧に応答した。この後、環境市民ネットワーク天理を代表して、本学の谷口直子准教授（生涯教育専攻）より花束が贈呈された。

最後に永尾教昭所長より閉会挨拶があり、講師を囲んで記念撮影が行われた。

なお、今回の講演内容の２つ目と３つ目の柱の部分は、「『元初まりの話』に登場する動物たち」と題して、『グローカル天理』2015年４月号～2019年４月号まで断続的に39回連載されている。ウェブPDF版も出ているので、詳細についてはそちらをご覧いただきたい。

佐藤孝則教授を囲んで